

# 八世紀における吐蕃の対南詔国政策

大原 良通

## 1 はじめに

南詔国は、唐の影響下からひとたび離れ再び唐の冊封体制下に入る 750 年から 794 年の間、吐蕃の支配下にあった。この 40 年ほどの期間、吐蕃が南詔国をどのように臣属させていたのか、ほとんど明らかにされていない<sup>(1)</sup>。

この時代、唐は玄宗皇帝の末期から、肅宗をへて、代宗・徳宗の治世にあたる。755 年に安史の乱が勃発し、763 年には吐蕃の長安占領、僕固懐恩の乱、さらに 783 年には朱泚の叛乱で徳宗が奉天に逃れるなど、混乱を極めた時期でもあった。このような時代背景と、唐が吐蕃や南詔と敵対していたこともあって、唐側にはこの時期の吐蕃や南詔に関する史料が少なく、また史料の記載内容も正確とは限らない<sup>(2)</sup>。

吐蕃は、754 年にチデツクツェン（704～754 在位）が死亡、ついでチソンデツェン（755～797 在位）が即位し、唐の混乱に乗じてその版図を東に延ばした時期にあたる。この時代の事情を知る手がかりとなっているのは、おもに敦煌から発見された文書類である。ただ、編年体で記されたいわゆる「編年記」（『Or.8212（187）』）は、南詔国が吐蕃に臣属する時期に当たる 748 年から 754 年が欠落し、また 765 年以降が無い。その欠を補うものとして吐蕃ツェンポ（贊普）の伝記である『P.T.1287』文書などがある<sup>(3)</sup>。

南詔国は他の五つの詔を併合し、唐・吐蕃双方との関係を保ちながら版図を広げている。はじめは唐寄りの政策を採り、北方では吐蕃の神川節度使と対峙した。その後、750 年には唐に背いて吐蕃に臣事し、794 年再び唐に降帰する。ほぼ閣羅鳳の治世に相当し、南詔国の基礎が固まった時代でもある。

この時代の南詔国の史料として「南詔徳化碑」があり、1992 年にチベット文で書かれた「格子碑」が発見されている。本稿ではこれらの碑文の内容から、吐蕃に関わる記述を中心に考察し、吐蕃による対南詔国政策の一端を明らかにしたい。

## 2 「南詔徳化碑」

「南詔徳化碑」（以下、「徳化碑」）は、南詔太和城社（大理市七里橋草帽街）にあり、高さ 390cm、幅 240cm。碑の陽文は約 40 行、一行約 90 字。碑陰は題名 41 行、一行字数は上下の剥落がひどく明らかではない。全文約 3100 字で楷書<sup>(4)</sup>。碑文の最後数行が剥離しており、碑が建てられた年月は不明。元初の人郭松年の著した『大理行記』には「（閣羅鳳）徳

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

化碑を立つ。其の碑は今も存す。即ち代宗の大暦元年也。」とある<sup>(5)</sup>。大暦元年は西暦766年にあたる。この碑の選者・立碑年代については論争がある<sup>(6)</sup>ようだが、選者は漢人で南詔清平官の鄭回というのが定説であり、年代については藤澤義美氏が、碑文に贊普鍾14(765)年春までの記事を含んでいることから、その建碑を766年頃だとしている<sup>(7)</sup>。

天宝9(750)年に南詔国が一気に反唐へと傾き、ついには吐蕃に従属した過程を『新唐書』南詔伝は、

鮮于仲通劍南節度使を領す。下忿にして方略少なし。故事、南詔嘗て妻子とともに都督に謁す。雲南を過ぐるに、太守の張虔陀之れを私し、求丐する所多し。閣羅鳳應ぜず。虔陀數しば之れを詬斬し、陰かに其の罪を表す。是れに由りて忿怨し、反し、兵を發して虔陀を攻め、之れを殺し、姚州及び小夷州凡そ三十二を取る。明年、仲通自から將たりて戎・嶺州に出で、二道に分ちて進み曲州・靖州に次す。閣羅鳳使者を遣わし罪を謝し、「願ふらくは虜ふる所を還し、自から新しきを得て、且つ姚州に城づくらん。如し聽さざれば、則ち吐蕃に歸命し、恐るらくは雲南唐の有にあらざるなり」と。仲通怒り、使者を囚え、進みて白崖城に薄り、大いに敗れて引き還る。閣羅鳳は戰鬪を斂め、京觀を築き、遂に北のかた吐蕃に臣たり。吐蕃以て弟と為す。夷は弟を「鍾」と謂ふが故に「贊普鍾」と稱し、金印を給ひ、號して「東帝」とす<sup>(8)</sup>。

と説明している。唐の雲南太守張虔陀の南詔国に対する無礼で高圧的な態度により、南詔が彼を攻め殺した。劍南節度使の鮮于仲通は大軍を率いて曲州・靖州に至った。南詔国王閣羅鳳は唐に背いた理由を説明し、陳謝しようとしたが、仲通は受け入れず南詔国に大敗する。さらにその過程で、南詔は鮮于仲通に吐蕃に臣属する旨を記した書簡を出していることがうかがえる。閣羅鳳のこの脅しとも取られかねない書簡の内容は、「徳化碑」<sup>(9)</sup>に、

贊普は今浪穹に觀覺するを見、或いは衆を以て相ひ威し、或いは利を以て相ひ導き、僮は蚌鵝交ごも守る若く、恐るらくは漁夫の擒ふる所と為らん。

とあり、すでに吐蕃から南詔国へ働きかけがあったことを示している。しかし、南詔国は、吐蕃に対して単に受け身的な態度で接していたわけではなく、『編年記』(『I.O.750』)214行目には、

byaggI lo la / btsan poe pho brang na dron na bzhugs / btsan yul du rgya'I pho nya / II zhang sho dang mywa la kag las / stsogs pa pyag 'tsald /

西の(733)年に、ツェンポの行宮はナジョン(na dron)に置かれて、ツェンポの国(btsan yul)に唐の使者リシャンショ(II zhang sho)と蛮ラカク(la kag)等が表敬に来た。

とあって、733年に「la kag(ラカク)」と言う人物が、すでに吐蕃を訪れている。この「la kag(ラカク)」は、南詔国王閣羅鳳の父皮羅閣のことだと考えられ<sup>(10)</sup>、南下してきた吐蕃と、六詔を統一して勢力を北にのばし始めた南詔国とが国境を接し、南詔国側からも吐蕃に対して積極的に交渉を進めていることがわかる。つまり、閣羅鳳の唐への脅しは場当たりの

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

な脅しではなく、下準備を終えた上での計画的な行動だったのである。

チベット側の史料では「P.T.1287」文書のチデツクツェン（704～754）の時代（343～346行目）に、

lho pyogs kyI smad na 'jang dum mywa dkar po zhes bya ba 'i rgyal po sde myI cung ba zhig 'dug pa // rgyal po thugs sgam po 'i rlabs dang thabs kyis bka' stsal te / mywa 'I rgyal po kag la bong zhes bya ba // 'bangs su pyag 'tshal nas / thabs gcung stsal te / myi mang gI snon btab / yul che 'I ni 'dab bskyed do //

南の方の東の南詔国（'jam）の一部である、白蛮といわれる小王国があった。王は思慮深い能力と策略で命令を下して、蛮の王のカクラボン（kag la bong）という者が、配下として表敬に来たので、称号弟（gcung）を賜って、（吐蕃の臣下として）人の数を増やし、大国の翼を広げた（＝領土を広げた）<sup>(11)</sup>。

として、南詔国王閣羅鳳自身が吐蕃に赴き、「弟（gcung）」の称号を賜ったとする。「徳化碑」には、

即ち首領楊利等を浪穹に差わし、吐蕃の御史論若贊に参る。御史は通變察情し、分かち帥いて入りて救う。

とあって、南詔国はまず浪穹の吐蕃御史論若贊に使いを出し、吐蕃はその要請に応じて救援を出している。この史料によって、鮮于仲通に対する南詔国の勝利には吐蕃の助力のあったことがわかる。つづいて、

既にして合謀して曰く「小の能く大に勝るは禍の胎なり、仁に親しみ隣に善くするは国の寶なり。」と。遂に男鐸伝・旧大酋望趙佺鄧・楊伝磨伴及び子弟六十人を遣わし、重ねて帛珍寶等の物を齎らし、西朝に凱を獻じ、贊普が仁明に屬し、重ねて我が勲効に酬ゆ。

とあって、鐸伝、旧大酋望趙佺鄧、楊伝磨伴および子弟六十人が吐蕃に遣わされたことを記しているが、チベット側史料にあるように閣羅鳳本人が行ったかどうかは不明である。「徳化碑」はさらに、

遂に宰相倚祥葉楽に命じて金冠・錦袍・金宝帯・金張状・安扛傘・鞍・銀獸及び器皿・珂貝・珠毯・衣服・馳馬・牛鞍等を持して、賜ひ兄弟の国と為す。

天宝十一（752）歳正月一日、鄧川において詔を冊して贊普鐘南国大詔と為す。長男鳳伽異に大瑟瑟告身・都知兵馬大将を授く。凡そ官僚に在るは、寵幸咸な被る。山河の約誓は、永固維城。年を改めて贊普鐘元年と為す。

とあり、吐蕃から宰相倚祥葉楽が遣わされ、金冠・錦袍・金宝帯等の衣装一式を賜った記事があり、752年正月に閣羅鳳の長男である鳳伽異は、洱海の北にある鄧川で吐蕃の告身である大瑟瑟（大トルコ石）を受け、都知兵馬大将に任命された。南詔国はこれを機に年号を贊普鐘元年と改めている。

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

贊普鍾 2 (753) 年には、

二年、漢帝又た漢中郡太守司空襲禮・内使買奇俊に命じ、師を帥ひ再び姚府を置き、將軍買瓘を都督と為す。僉な曰く「漢は徳に務めず、而して力を以て争ふ。若し速かに除かざれば、恐るらくは後の患ひと為らん。遂ひに軍將王丘各を差わし其の糧道を絶ち、又た大軍將洪光乘等を差わし、神州都知兵馬使論綺里徐と同じくして府城を囲む。信宿未だ踰えず、破ること朽を拉く如し、買瓘を面縛し、士卒全駆す。

とあって、吐蕃と南詔国が連携して唐の姚州府を攻撃している。

【新唐書】南詔伝には、南詔国が吐蕃に臣属してからのこととして、

會たま楊国忠劍南節度を以て国に當り、乃ち天下の兵凡そ十萬を調のへ、侍御史李宓をして之れを討たしむ。餉を輦ぶ者尚ほ在らず。海を涉りて疫死するもの道において相ひ踵ぐ。宓大和城に敗れ、死する者十のうち八<sup>(12)</sup>。

とあり、李宓が討伐軍を指揮して南詔国を攻撃し、大敗していることが記されている。対応する「徳化碑」の記事は、

三年、漢又た前の雲南郡都督兼侍御史李宓・広府節度何履光・中使薩道懸遜に命じて、秦・隴の英豪を総べ、安南の子弟と兼に隴坪に頓營し、広く軍威を布く。乃ち舟楫備へ修め、水陸俱に進まんことを擬る。遂に軍將王樂寛等に令し、軍を潜めて造船の師を襲ひ、伏屍は毘舍の野に徧くす。李宓猶ほ力を量らずして、進みて遼川に逼る。時の神川都知兵馬使論綺里徐救ひに來り、已に巴躡山に至る。我は大軍將段附克等に命じて、内外相應して、競角競衝す。

とあって、唐側の史料には記録されていないが、どちらの戦いも吐蕃の神川都知兵馬使論綺里徐との共同作戦であった。

【新唐書】南詔伝はつづけて、

會たま安祿山反し、閣羅鳳之に因り嶺州會同軍を取る<sup>(13)</sup>。

とあり、つづけて閣羅鳳が安祿山の乱を利用して嶺州を攻略したと述べるが、「徳化碑」には、

(贊普鐘) 五 (756) 年。范陽節度安祿山竊みて河・洛に據り、開元帝は出て江・劍に居る。贊普は御史贊即羅于悉結を差わし敕書を齎らして曰く「徳を樹つるは滋長に務め、悪を去るは(その)本を除くに務む。越嶲・會同、謀りごと多く我に在り、之れを圖るは此れ美を為す也。」と。詔は恭しく上命を承り、即ち大軍將洪光乘・杜羅盛・段附克・趙附于望・羅遷・王遷・羅奉・清平官趙仝鄧等を遣わし、細于藩を統べしめ、昆明の路従り、宰相倚祥葉樂・節度尚揀(棟)贊と同じくして越嶲を伐つに及ぶ。詔親から大子潘を帥ひ圍みて會同に逼る。越嶲固く拒まば戮せられ、會同は降るを請ひて害する無し。子女・玉帛は、百里の塞途、牛羊・積儲は、一月の館穀。

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

とあって、南詔国が吐蕃のツェンポの要請で、越嶲地方を討伐したことがわかる。

『編年記』（『Or.8212 (187)』）の21行目には、

(spre'u lo la babste /) (・・・中略・・・) / blon khri bzang dang zhang stong tsan dang kag  
la bong gsum gyi dmagis / se chu phab /

(申の年、756年)、ロン・チブサン (blon khri bzang) とシャントンツェン (zhang stong tsan) と、閻羅鳳 (kag la bong) の三人の軍隊が、嶺州 (se cu) を降した。

と見えるように、チベット側の史料とも合致し、唐・南詔国・吐蕃のそれぞれの立場から史料が残されている貴重な例である。「徳化碑」に見える宰相倚祥葉楽は『編年記』（『Or.8212 (187)』）のロン・チブサン (blon khri bzang) に当たることは間違いなく、先に見た鳳迦異を冊命するために吐蕃から南詔国に遣わされた人物である。

ロン・チブサン (blon khri bzang) は『P.T.1287』文書の宰相表 113 行目に、

de'i 'og du mgos khri dzang yab lag gIs byas so //

その後に、ゴェ・チブサンヤブラ (mgos khri bzang yab lag) が (宰相に) 就任した。

とあるゴェ・チブサンヤブラだと考えられ、倚祥葉楽と音のうえからも間違いない。彼は、755年にシャントンツェン (zhang stong tsan) と洮州を攻略し<sup>(14)</sup>、756年に閻羅鳳と共に嶺州を降し、同年、吐蕃の夏季の会盟を主催している。758年には、ギェサンタグナンと共に涼州を攻め、759年にシャントンツェンとアシャを攻略し、次いで小ツォンカを落とし、763年に宰相となった人物である<sup>(15)</sup>。

「徳化碑」に見えるチブサンヤブラと同時に吐蕃から作戦に参加した節度尚棟贊は、『編年記』（『Or.8212 (187)』）にあるロン・チブサン・閻羅鳳とともに嶺州に進軍したシャントンツェン (zhang stong tsan) ということになる。

しかし、『金石萃編』<sup>(16)</sup>・『大理叢書』<sup>(17)</sup>・『雲南史料叢刊 第二卷』<sup>(18)</sup>は「尚檢贊」と読み、『大理文化』<sup>(19)</sup>・『雲南古代石刻叢考』<sup>(20)</sup>は「尚棟贊」と読んでいる。おそらく、棟の字が見づらく、木偏と東がはっきりしなかったのだろうが、音の上からこれは「棟」でなければならない。彼はロン・チブサンと共に洮州 (te'u cu) を攻略し、閻羅鳳と嶺州を落とした後、757・758年と夏季の会盟を主催し、759年にロンチブサンと共にアシャと小ツォンカを攻め、761年には松州 (zong cu) とサンガル (zangs kar) を攻め落としている<sup>(21)</sup>。762年にシャンギャルシグ (尚結息) とブムリンの鉄橋 (bum lIng lcag zam) を渡って武寧軍 ('bu shIng kun)・秦州 (zIn cu)・河州 (ga cu) に勝ち、京師 (keng shi: 長安) に至った<sup>(22)</sup>。漢文史料では尚息東贊と記され<sup>(23)</sup>、尚結息 (シャンギャルシグ: shang rgyal zigs)・馬重英 (ロンタグラ: blon stag sgra)・尚贊婆 (シャントツェンワ: shang btsan ba) と並んで長安攻略の主要な将軍の一人である。763年にトルコ石の告身を受け、四辺防御大將軍となっている。

「徳化碑」には続く贊普鍾 6 (757) 年にも、

六年。漢復た越嶲を置き、楊廷璉を以て都督と為し、臺登を固むるを兼ね。贊普の使ひ

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

来りて曰く「漢は今更に越嶲を置き、昆明を援くるを作す。若し再び除かざれば、恐るらくは滋蔓を成さんことを。」と。既に奉を挙げ旨明らかなれば、乃ち長男の鳳伽異を遣し軍を瀘水に駐め、事制の宜を權る。

とあって、南詔国は吐蕃の要請で越嶲を攻撃している。したがってこれら南詔国による一連の対唐攻撃は、南詔国が唐の内乱に乗じておこなった作戦ではない。尚棟贊の経歴からでも理解できるように、763年の吐蕃による長安占領につながる唐包圍作戦の一環として、吐蕃主体でおこなわれたものである。

以上、「徳化碑」に見える吐蕃関係の記事を見たが、唐側の史料ではあたかも南詔国主体でおこなわれているかのように記されている唐への侵攻も、その背後に吐蕃の姿が浮き上がってくる。吐蕃は、対唐作戦に南詔国を利用していたのである。

「徳化碑」の碑陰には、閣羅鳳時代の100人以上の官吏の名前と役職などが記されている。記されたそれらの役職・肩書には、吐蕃の南詔国に与えた影響の一端が示されており、一瞥しておきたい。ただ、碑文の上下の剥落がひどく、役職氏名の全てが読みとれる物は少ないので、それらの中でも比較的完全に読みとれる事例を以下に示すと、

- (14行目) 大軍将兵曹長小頗弥告身賞紫袍金帶段君利
- (17行目) (上欠) 倉曹長小銀告身賞二色綾袍金帶兼大大虫皮衣□盛顛
- (18行目) 大惣管小銀告身賞二色綾袍金帶兼大虫皮衣□□□
- (22行目) 大惣管兼押衛小鑰石告身賞二色綾袍金帶石覆苴
- (28行目) 軍将前兵曹副官小銅告身賞紫袍金帶杜顛伽
- (37行目) 詔親大軍将大金告身賞二色綾袍金帶李外成苴

とある。

それぞれ、大軍将兵曹長や大惣管といった官職につづいて小頗弥告身・小銀告身・小鑰石告身・大金告身といった身分が記されている。碑陰には、大金・小金・大頗弥・小頗弥・小銀・小銅・大鑰石・小鑰石の八種類の告身が見られる<sup>(24)</sup>。

すでに、閣羅鳳の長男鳳伽異に吐蕃から大瑟瑟告身が与えられたことを見たが、この碑陰の名簿から南詔国のほぼすべての官吏に、吐蕃から告身の授けられたことが理解できる。おそらく、それらの告身は751年正月におこなわれた鳳伽異の冊命と同時に、チブサンヤブラから授与されたものだろう。

さらに、(17行目)と(18行目)の人物には大大虫皮衣や大虫皮衣という肩書が見える。大虫とは虎のことであり<sup>(25)</sup>、大虫皮衣は虎の皮の衣という意味になる。これは、敦煌文書等に見られる「stag zar」つまり「虎皮の肩かけ」だと思われ<sup>(26)</sup>、やはり、吐蕃が軍功をあげた者に対して与えた物だと考えられる。ただ「大虫皮衣」と「大大虫皮衣」の二種類があることから、「虎皮の肩かけ」には二つのランクが存在したようである。

### 3 「格子碑」

1992年に雲南省麗江納西族自治県金庄区格子村金沙江近くで発見され、馮智氏が「滇西北吐蕃鉄索遺址及古藏文石碑考略」<sup>(27)</sup>という論文においてスケッチと釈文を發表した。

馮智氏の論考によると、石碑が発見された場所は鉄橋遺跡の近くだとしている。鉄橋は、清の顧祖禹撰『讀史方輿紀要』卷117・雲南5・巨津州の条によると「雲南省麗江県の西北、故の巨津州の北百三十里」であるとする<sup>(28)</sup>。上述のようにシャントンツェンはシャンギャルシグと共にこの鉄橋を通過して長安を攻めている。

吐蕃は早くからこの地域に注目し、737年頃<sup>(29)</sup>のこととして『蛮書』卷3・六詔第3に、

矣羅識は北のかた神川に走げ、神川都督之を羅些城に送る<sup>(30)</sup>。

とあるように、南詔が劍川を破ったさい、矣(川)羅識が神川(鉄橋)に逃げ、吐蕃の神川都督は彼を吐蕃の都ラサに送っている。また「徳化碑」で見たように、贊普鍾2(753)年の姚州攻撃や、3(754)年の李宓との戦いの時には、鉄橋付近に置かれた神川都知兵馬使論綺里徐が援軍として来ている。

後に、南詔国は790年頃から吐蕃に反感を持ち始め、794(貞観10)年に唐から冊封されて南詔国王となるが、再び唐の冊封体制下に組み込まれた時のこととして、『旧唐書』南詔伝に、

(異)牟尋遽かに兵五千人を遣わし吐蕃を成る。乃お自から數萬を將いて其の後を踵ぎ、晝夜兼行して、其の備え無きに乗じて、大いに吐蕃を神川に於て破る。遂に鉄橋を断ち、使ひを遣わし告捷す<sup>(31)</sup>。

と見え、唐へ忠誠を誓う証として、鉄橋を攻めて切断している<sup>(32)</sup>。

唐と吐蕃と南詔国の三つの国の接点が鉄橋であり、その地理的に非常に重要な場所から発見された石碑である。瑟格・蘇郎甲楚氏は、馮智氏の釈文をいくらか手直しして「格子吐蕃藏文石碑之我見」<sup>(33)</sup>を發表した。二人の釈文はともに碑を実見したうえでの解釈である。王堯氏は「雲南麗江吐蕃古碑釈讀筭記」<sup>(34)</sup>で、その写真から考察を加え、また写真も掲載している。

この格子碑は現在、麗江県博物館にあるとされ、碑の大きさは、高さ158cm、幅76cm、厚さ32cmで、欠損は少なく石質は堅いとある。チベット文は五行で、以下に釈文と訳を示す。

- 1 mtsho rum long la dag thog me\* / rgya 'bangs las
- 2 rgya rje gtan kyI\* rjer myI\*\* rung nas / btsan po lha sras / la\*\*\*
- 3 glo ba nye ste // blon skyes bzang la phyag 'tshal nas / pho tshed\* zang
- 4 mang na\* / gser chen po ltsald\*\* // long la dag\*\*\* gtsang\*\*\*\* cen ltsald\*\*\*\*\* pa las  
lo\*\*\*\*\*
- 5 dgu bcu lo na\* de gum // ba'i mchad\*\* pa/

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

1 行目\*王：me'。 2 行目\*王：gyi。 \*\*王：mi。 \*\*\*王：la'。 3 行目\*瑟格：chod。 4 行目\*瑟格：ni、王：mi。 \*\*王：stsald。 \*\*\*王：dag la。 \*\*\*\*王：gcang。 \*\*\*\*\*王：stsald。 \*\*\*\*\*王：pho。 5 行目\*馮・瑟格・王：lon。 \*\*馮：mchar。

ツォルン・ロンラタ (mtsho rum long la dag) は、はじめは唐 (rgya) の臣下であった (状況) から、唐の主は永遠の主人として相応しくないので、神の子であるツェンポに忠誠を誓い、ロン・ケサン (blon skyes bzang) に服従したので、ポツェサンマンで大金字の告身を賜った。ロンラタはツァンチェン (gtsang chen) を賜ってから、九十歳となって世を去った。

内容からツォルン・ロンラタの墓誌であろうと判断できる。建碑年については、石碑に記年がないため、確定できない。しかし、碑文にはじめロンラタが唐の臣下であって、後に吐蕃に忠誠を誓ったとする記述と、その時の吐蕃の大臣がロン・ケサンであるという点を手がかりにある程度明らかにできると考える。

まず、この地域が唐の支配下にあった年代から考察してみる。吐蕃はチドゥソン王の時代 (676~704 年) から雲南地方へ積極的に勢力範囲をのばしており、王自身が雲南遠征によって命を落としている<sup>(35)</sup>。『編年記』(『I.O.750』) 95~97 行目に

'brugi lo la bab ste / (…中略…) / dgun btsan pho chab srid la mywa la gshegs pa las / dgung du gshegs /

辰 (704) 年、(中略)、冬ツェンポは遠征して蛮 (mywa) に行かれて、天に逝かれた<sup>(36)</sup>。

また、『P.T.1287』文書 334~335 行目には、チドゥソン王時代のこととして、

'ung gl log du 'jang la chab srid mdzad de mywa dkar po dpya' phab / mywa nag po'bangsu bkug pa la stsogste /

その後、ジャン ('jang) に遠征なさって、白蛮 (mywa dkar po) に貢を課し、烏蛮 (mywa nag po) を配下に組み込むなどして、

とある。はじめ「'jang」は地域を示し、その地方全体を南詔国が統一することにより、後には「'jang」が南詔国を示すようになったと考えられる。「mywa」は民族つまり「蛮」を示しており、「mywa dkar po」は「白蛮」であり「mywa nag po」は「烏蛮」である<sup>(37)</sup>。南詔が六詔を合わせて統一国家を築く以前に、すでに吐蕃は雲南地方に勢力を伸ばしていたことがうかがえる。

『旧唐書』吐蕃伝には、睿宗即位 (710 年) の後のこととして、

睿宗即位し、攝監察御史李知古上言すらく「姚州の諸蛮、先に吐蕃に属す。請うらくは兵を發して之を撃たんことを」と。遂に知古をして劍南の兵募を徴し往きて之を経略せしむ。蛮酋傍名すなわち吐蕃を引きて知古を攻め、之を殺す。仍お其の屍を断ち以て天を祭る<sup>(38)</sup>。



## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

とあり、李知古が吐蕃に属している姚州<sup>(39)</sup>（洱海から滇池にかけての地域）の諸蛮を制圧することを提案し、劍南の兵が派遣された。蛮の酋長である傍名は吐蕃を引き入れて李知古を攻め、李知古を殺して、その屍で天を祭っている。この史料から710年頃には、すでに吐蕃の勢力が雲南地方に及んでいたことがわかる。

「蛮書」巻4には、

施蛮、本は烏蛮の種族なり。鉄橋の西北大施賧小施賧・劍尋賧、皆な其の居る所の地なり。（…中略…）。皆な吐蕃偽封して王と為る<sup>(40)</sup>。

とある。施蛮は烏蛮種で、鉄橋の西北に住んでいたとする。鉄橋の西北に位置する大施賧・小施賧・劍尋賧は、現在の麗江納西族自治州にあたる。同じく「蛮書」巻4に、

順蛮、本と烏蛮の種族、初め施蛮部落とともに劍・共の諸川に参居す。（…中略…）。其の部落主吐蕃亦た王に封ず<sup>(41)</sup>。

とあり、この順蛮ももとは烏蛮種で施蛮とともに劍川・共川に住んで居り、同じく吐蕃によって王に封じられている。劍川は、現在の大理白族自治州の鶴慶にあたる。これらの史料から、石碑の発見された地域を中心にして、吐蕃は積極的に、そこに住む民族の長達を王に封じていることがわかる。以上のように、鉄橋付近ははやくから吐蕃の影響下にあり、この地域が直接唐の支配下にあった可能性は少ないと考えられるので、「格子碑」に見える「はじめは唐の臣下であった」というのは、南詔国を通じて唐の影響下にあったと考えるのが妥当であろう。

南詔国は、730年代に洱海の周辺を統一し、739年には大和城に遷都している。当初は、唐よりの政策を採り、738年に国王皮羅閣が唐から蒙婦義の名前を賜り、また745年には孫の鳳伽異が唐へ入朝している。この地域が南詔国の支配下に置かれるようになるのは、南詔国が他の五詔を併合しながら北進し、北から南下してきた吐蕃と国境を接することになる740年頃であったと考えられる。このころ、鉄橋付近の吐蕃側には吐蕃の神川節度使が置かれ、南詔国側の地域は、南詔国を通じて唐の支配下にあった。

次に吐蕃の大臣ロン・ケサンについて考察する。ロン・ケサン (blon skyes bzang) については、

- 1 「バル・ケサンドンツァブ ('bal skyes bzang ldong tsab)」
- 2 「ロン・ケサンギャルコン (blon skyes bzang rgyal kong)」
- 3 「ロン・ケサントグナン (blon skyes bzang stag snang)」

の三人の可能性がある。

1、「バル・ケサンドンツァブ ('bal skyes bzang ldong tsab)」は、729年に、ムレチュレ (mu le cu le) で唐の軍隊を撃ち、734年にキシヤチェン (khyi sha can) を攻め落とし、737年には小勃律に赴いている。744・746・747年には、大論のドチュンサンオルマン ('bro cung bzang 'or mang) と共に冬季会盟を主催し、彼のあとを継いで宰相となる。チアツクツェン

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

王暗殺事件に関係したと考えられ、その結果 755 年に処罰されている<sup>(42)</sup>。

2、「ロン・ケサンギャルコン (blon skyes bzang rgyal kong)」は、756 年の冬季・夏季の会盟を開き、757 年に死亡している<sup>(43)</sup>。

3、「ロン・ケサntagグナン (blon skyes bzang stag snang)」は、746 年に褒賞を受け、758 年にロンチブサンと共に涼州を攻撃し、冬季会盟を主催し、765 年には唐の渾日進とグログン ('gu' log sgang) で戦っている<sup>(44)</sup>。

これら三人のうち、ロン・ケサntagグナンは、「徳化碑」でみたロンチブサンと行動を共にしており<sup>(45)</sup>、一番可能性が高いと思われる。ロン・ケサンギャルコンまたはロン・ケサntagグナンのどちらであれ、碑文に記載された「ツェンポに忠誠を誓」った時期は、750 年頃ということになる。

南詔国が吐蕃に臣属した時のこととして、「P.T.1287 文書」347~349 行目に、

'jang mywa 'I po lta zhlg rgya la lta lta ba las // rgya rjes dgrar blangste // btsan po khri lde gtsug brtsan gyi zha sngar glo ba nye nas //

南詔国 ('jang) の蛮の王なるものは、唐を何度も観察してから、唐の主を敵となし、ツェンポ・チデツクツェン (khri lde gtsug brtsan) の御前に忠誠を尽くすことにして、

とあって、「格子碑」の内容と共通する表現を取っているのも注目に値するだろう。

前述のように南詔国が唐の支配下に復帰したときには鉄橋を断ち切っており、「格子碑」にそのことが記されていないことから、建碑年代は 750 年以降、794 (貞元 10) 年以前となる。石碑がチベット語で書かれ、ロンラタが九十才まで生きたことを加味すると、きわめて 794 年に近い年に建てられたと考えられる。

4 行目から 5 行目にかけて見えるポツェサンマンという言葉が地名ととるか人名ととるか説の分かれるところである<sup>(46)</sup>。これを地名ととるならば、ロンラタはまず、吐蕃から大金字の告身をもらい、その後ツァンチェンの位をもらったことになる。しかし、ツァンチェンは大金字よりもだいぶ下の位に位置し、大金字の告身をもらってからツァンチェン (gtsang chen) をもらうというのは理解に苦しむことになる。もしこの読みが正しいとするならば、ツァンチェンが、12 の階級に分かれた位階よりも下に位置すると理解する従来の位置づけ<sup>(47)</sup>ではなく、軍功をしめすタクツアル (stag zar) つまり「虎皮の肩かけ」のように、位階制とは別に与えられる勲章のようなものと考えれば、「徳化碑」の碑陰に見える大虫皮がそうであったように、金字告身とは別に特記されても矛盾無く理解できる。

#### 4 おわりに

吐蕃は、南詔国をチベット帝国の傘下に組み込むことによって、唐への包囲網を完成することができた。「徳化碑」の記述から明らかなように、吐蕃から南詔国に指示が与えられて、吐蕃と南詔国が連携して唐を攻撃している。しかも、「新唐書」南詔伝に、

異牟尋立つ、衆二十萬を悉くして入寇す。吐蕃と力を併す。(…中略…)。其の下に令し

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

て曰く「我が為に蜀を取り東府と為さん。工伎は悉く邏娑城に送り、歳ごとに一練を賦す。」と<sup>(48)</sup>。

とあり、また『P.T.1287 文書』347～349 行目に、

rgya yul phab kyis nI yul dang // mkhar du bchas te pul // g-yul sprad kyis nI / rgya btsan lug  
ltar bskyangs so //

唐の領土を侵略して得た地域と城などを（吐蕃に）献上し、戦いによって得た唐の捕虜をまるで羊を追うように管理した。

と見えるように、吐蕃は南詔国から兵力の供給を受けていただけでなく、南詔国が捕らえた唐の捕虜も収容し、大きな利益を享受していたのである。

吐蕃の南詔国に対する支配構造は、「徳化碑」で見たように、吐蕃が南詔王を冊封し、碑陰に見る南詔国官吏の肩書きに吐蕃の告身が見られること、格子碑には吐蕃から大金字の告身やツァンツェンをもらったことを特筆していることから、吐蕃は南詔国に対して、吐蕃の告身を与える事によってチベット帝国内における地位を保証していることが理解できる。吐蕃は、南詔国を吐蕃の告身を与えることによって自国のヒエラルキーの中に取り込み、さらに、軍功に対して大虫皮衣（タクツァル）やツァンツェンなどを与えて褒賞としている。吐蕃は南詔国を弟の国として国家の体裁を維持させたまま、その支配力を行使している。それは同時に、唐側から観察した場合、南詔国の背後にある吐蕃の姿が見えにくく、吐蕃の要請で動いた南詔国の行動を南詔国独自の行動と見誤らせる原因となった。

大臣であるチブサンヤブラが閻羅鳳や鳳伽異を冊命し、ロン・ケサンがロンラタを冊命したように、告身の授与や褒賞は大臣を通じておこなわれ、同時にその大臣がこの方面の司令長官を兼ねたと考えられる。また、ロンラタがツェンポではなく、ロン・ケサンに服従していることから、ツェンポが直接その地域を支配するのではなく、司令官を通じておこなう間接的支配であったといえよう。今回論考を加えた「徳化碑」と「格子碑」にツェンポの名前が刻されておらず、ただ神聖ツェンポとして記され、個人ではなく美称で呼ばれている。これは、吐蕃側がツェンポを神として扱い、より高い次元にツェンポを押し上げることによって、その帝国が内包している異民族に対して、精神的な支配をもおこなおうとしたからではないだろうか。

## 註

- (1) 南詔国に関する主な研究として、藤沢義美著『西南中国民族史の研究』（大安、1969年。以下『西南中国』）、Charles Backus、『Nan-chao Kingdom and T'ang China's Southwestern frontier』（Cambridge University Press、1981年。以下『Nan-chao』）、林謙一郎「南詔国の成立」（『東洋史研究』、1990年、第49巻第1号、87～114頁）などがあるが、どの研究も南詔国と吐蕃との関係について、その重要性は認めているが十分に議論が尽くされているとは言い難い。陳楠「吐蕃と南詔及洱河諸蛮関係叢考」（『藏史叢考』、民族出版社、1998年、110～148頁）は吐蕃と南

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

詔の関係をそれぞれの国の歴史的背景をふまえてまとめている。

- (2) 佐藤長「安史の乱とチソンデツェンの即位」(『古代チベット史研究』下、東洋史研究会、1959年。再版同朋社、1977年。以下「古チ」) 501～509頁で、チデツクツェンの死からチソンデツェンの即位にかけて、唐側が吐蕃の状況を十分に把握できず、史料に混乱が生じていることを指摘している。
- (3) J.Bacot, Ch.Toussaint, F.W.Thomas 訳注『Documents de Touen-Houang Relatifs a L'histoire du Tibet』(Paris, 1940年)。王堯・陳踐訳注、『敦煌本吐蕃歴史文書』(民族出版社、1992年)。Ariane Spainien, Yoshiro Imaeda 編『Choix de Documents Tibétains』TomeII (Bibliothèque Nationale, Paris, 1979年)。Yoshiro Imaeda, Tsuguhito Takeuchi『Choix de Documents Tibétains』TomeIII (Bibliothèque Nationale, Paris, 1990年)。黄布凡・馬徳訳注『敦煌藏文吐蕃史文献訳注』(甘肅教育出版社、2000年)。
- (4) 孫太初「南詔德化碑箋證」(『雲南古代石刻叢考』文物出版社、1983年) 30頁。
- (5) 郭松年撰『大理行記』(叢書集成初編、中華書局、1985年) 2頁。
- (6) 方国瑜「大理行記概説」(大理白族自治州南詔史研究会編『南詔史研究参考資料』第一集、1982年) 76頁、方国瑜主編『南詔德化碑』(『雲南史料叢刊 第二卷』、雲南大学出版社、1998年) 365～377頁など。
- (7) 藤澤義美「南詔德化碑の建碑事情」(『西南中国』) 362頁。
- (8) 『新唐書』卷222上・列伝147上・南蛮上・南詔上(中華書局) 6271頁。
- (9) 碑文はおもに周祐注訳「南詔德化碑」(『大理文化』1984年第1期、31～49頁)、『南詔德化碑』(大理市文物保護管理所、1988年)を参照した。
- (10) 王堯・陳踐訳注『敦煌本吐蕃歴史文書(増訂本)』(民族出版社、1992年) 153・184頁。
- (11) 『P.T.1287』文書・343～346行目。
- (12) 『新唐書』卷222上・列伝第147上・南蛮上・南詔上・6271頁。
- (13) 『新唐書』卷222上・列伝第147上・南蛮上・南詔上・6271頁。
- (14) 『編年記』(『Or.8212(187)』) 13行目。
- (15) 『編年記』(『Or.8212(187)』) f22・32・35・60行目、『P.T.1287』113行目。
- (16) 王昶選「南詔德化碑」(『金石萃編』卷160、經訓堂藏版) 6帖裏。
- (17) 楊世鈺主編『大理叢書・金石編10』(中国社会科学出版社、1993年) 4頁。
- (18) 方国瑜主編『雲南史料叢刊 第二卷』(雲南大学出版社、1998年) 380頁。
- (19) 周祐注訳「南詔德化碑」(『大理文化』1984年1期) 38頁。
- (20) 孫太初著「南詔德化碑箋證」(『雲南古代石刻叢考』、文物出版社、1983年) 50頁。
- (21) 『編年記』(『Or.8212(187)』) 13・21・26・35・37～38行目。
- (22) 『編年記』(『Or.8212(187)』) 51～53行目。「吐蕃の長安侵入」(『古チ』下) 526～527頁。
- (23) 『旧唐書』卷196上・列伝第146上・吐蕃上・5239～5240頁。
- (24) 向達氏は「蛮夷風俗第八」(樊綽撰・向達校注『蛮書校注』、中華書局、1962年、以下『蛮書』) 208～209頁の注で大虫皮と告身は吐蕃から学んだものか受けたものだろうとしている。王堯氏は「第一章 政治制度」(『吐蕃文化』、吉林教育出版社、1989年) 34～35頁で、これらの告身は吐蕃から与えられた物としている。
- (25) 『蛮書』、174頁。

## —八世紀における吐蕃の対南詔国政策—

- (26) 『蛮書』、208～209頁。
- (27) 馮智「滇西北吐蕃鉄索遺址及古藏文石碑考略」(『中国藏学』1994年・第4期) 136～145頁。
- (28) 「長慶会盟前後」(『古チ』下) 681頁。
- (29) 「The Formation of The Nan-chao Kingdom」、『Nan-chao』。
- (30) 『蛮書』、56頁。
- (31) 『旧唐書』卷197・列伝第147・南詔伝・5283頁。
- (32) 『旧唐書』卷13・本紀第13・徳宗下・379頁にも「(貞元)十(794)年(…中略…)。三月乙亥、(…中略…)。庚辰、南詔異牟尋攻めて吐蕃の鉄橋已東の城壘一十六を収め、其の王五人を擒らへ、其の民衆十萬口を降す。」とある。
- (33) 瑟格・蘇郎甲楚「格子吐蕃藏文石碑之我見」(『西藏研究』1995年・第4期) 49～50頁。
- (34) 王堯「雲南麗江吐蕃古碑積讀節記」(『唐研究』第7巻、2001年) 421～427頁、図版7・8。
- (35) 「The Tibetan Connection」(『Nan-chao』) 24～45頁。
- (36) 『新唐書』卷216上・列伝第141上・吐蕃上・6080頁に、長安3(703)年のこととして「虜南の属帳皆な叛き、贊普自から討ち、軍に死す。」とある。
- (37) F.W.Thomas 著『Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan』Part II (Royal Asiatic Society、1951年) 107頁。『Documents de Touen-Houang Relatifs a L'histoire du Tibet』149頁。「金城公主入藏の年次と背景」(『古チ』上) 399～400頁。
- (38) 『旧唐書』卷196上・列伝第146上・吐蕃上・5228頁。
- (39) 「大理盆地の前史」(『西南中国』) 7頁では、姚州について、大理盆地を指すとされている。
- (40) 『蛮書』94頁。
- (41) 『蛮書』95頁。
- (42) 「安史の乱とチソンデツェンの即位」(『古チ』下) 503～506頁。『編年記』(『I.O.750』) 201・219・225・247・253行目、『編年記』(『Or.8212 (187)』) 3・8・11行目、『P.T.1287』112行目。
- (43) 『編年記』(『Or.8212 (187)』) 18・19・25行目。
- (44) 『編年記』(『Or.8212 (187)』) 9・32・36・44行目、『P.T.1287』文書378～80行目。『古チ』753頁に、中央翼低地の指揮官の名前として Sbas skyes bzang stag snang の名前が見えろとし、『古チ』557頁では、ロンケサントグナンが論悉頰藏として『新唐書』吐蕃伝下に見える清水の会盟(783年)における吐蕃の将領の中に名前が見えろとする。
- (45) 『編年記』(『Or.8212 (187)』) 32～33行目の戌(758)の年の条  
 blon khri bzang dang skyes bzang stag snang las scogs pas khar tsan leng cu phyogs dra ma dngas par lo cig /  
 ロン・チブサン (blon khri bzang) とケサントグナン (skyes bzang stag snang) が、カルツェンレンチュ (khar tsan leng cu) の方へ兵を率いていったという一年である。
- (46) 王堯氏は祖父のツェサンマンとしている。
- (47) 山口瑞鳳「吐蕃の敦煌支配期間」(榎一雄編『講座敦煌2 敦煌の歴史』大東出版社、1980年) 204頁。
- (48) 『新唐書』卷222上・列伝第147上・南蛮上・南詔上・6272頁。